ISSN 0285-9823

女子大國文

第百六十四号

平成三十一年一月発行

二〇一八年度公開講座
軍記史の終章まで ……笹川祥生（一）

董黯覚書（上）
――董黯画巻の復元――……黒田彰（三二）

心に吹く風
――樋口一葉「闇桜」論（その一）――……峯村至津子（六五）

太宰治「碧眼托鉢」におけるアンドレ・ジッドの講演『シャルル・ルイ・フィリップ』の受容（二）……宮崎三世（九四）
――「歓喜」と「生の躍動」に満ちた「市井の正義派」としてのフィリップ

京都女子大学図書館所蔵『方丈記』慶安五年写本……中前正志（一一四）
――もう一つの名古屋本――

両足院蔵『月令抄』翻刻・解説（上）……田上稔（一三七）

彙報……（三〇）

京都女子大学国文学会

女子大國文　第百六十四号　平成三十一年一月発行　京都女子大学国文学会

女子大國文　第百六十四号

平成三十一年一月十五日　印刷
平成三十一年一月三十一日　発行

〒六〇五―八五〇一　京都市東山区今熊野北日吉町三五番地
編輯兼発行者　京都女子大学国文学会
電話　〇七五―五三―九〇七六
FAX　〇七五―五三―九一二〇
振替　〇一〇八〇―五―三一一四

〒六〇二―八二四六　京都市上京区上長者町通黒門東入
印刷所　西村印刷株式会社
電話　〇七五―四四一―四一〇八㈹
FAX　〇七五―四三一―六二八二

彙　報

○女子大國文第一六四号をお届けします。
○加納重文先生のご逝去を悼む追悼文を掲載いたしました。
○公開講座、学会旅行の感想文を掲載しました。

研究室だより

○本学科教授をお務めになりました加納重文先生が逝去されました。謹んでご冥福をお祈り申し上げます。

二〇一八年度国文学会行事（後期）

○学会旅行
十一月十一日（日）に、学科主任・運営委員の先生方と十三名の学生が参加し、彦根の散策を行いました。

加納先生追悼文

加納重文先生の訃報

坂本信道

その人はゆっくりと階段を降りてきた。一九九一年初夏、福岡のホテルでのことである。一面識もなかったが、どことなく浮き世離れした雰囲気を醸し出す風体に、あの人が加納先生に違いない、と直感できた。京都女子大学に赴任の決まったわたしと担当教官今西祐一郎先生のところに、専門分野が同じ平安文学だということで挨拶のため来福されたのであった。この時から加納さん――本名カノウシゲフミ、学界での通称ジュウブンさん、時に学生は親炙からシゲブン先生と呼んでいた。本人は、僕は国宝の次やねん、と言っていた――とのつきあいが始まった。

初対面ではあったが、それに先立ち加納さんとはちょっと縁があった。その少し前、九州大学の国文学研究室では、『源氏物語の研究』という加納さんの著書が話題になっていた。歴史物語の専門家の本でありながら、源氏の研究書として非常に秀でているからぜひ買って一読すべしと、今西先生の評。ところがこの本、「望稜舎（ぼうりょうしゃ）」というよく素性のわからないところが出版元になっている。調べてみると著者加納さんみずからが立ち上げた出版社、

つまり私家版であるらしく、書店経由の通常のルートでは手に入らない。中古文学会会員には案内が来ていたので、修士課程に在学中のわたしが研究室の購入者分を取りまとめ、加納さんあてに直接申し込んだ。今思えば、高名な加納重文先生に一介の院生が手紙を書くということで、畏れと緊張を感じていた。しばらくして、九州の若い人たちから評価されてうれしい、といった内容の文が添えられた大きな小包が研究室に届いた。加納さんに論文の抜き刷りを送るようになったきっかけは、そんなところだった。着任してから、京女にわたしを呼んでくれたのは院生時代に本を大量購入したからですよね、などと言って笑ったことも、なつかしく思い出される。

望稜舎といえば、加納さんらしい逸話がある。本人の弁によれば、『日本古代文学地名索引』（一九八五年　ビクトリー社）を出したところ存外な売れ行き、これなら自分で出版すれば相当に儲かるのではとの目論見から望稜舎を立ち上げたらしい。会社設立にあたっての煩雑な事務的手続きなどは、まったく苦にしない性格が学者離れしている。はたして、二匹目のドジョウとなるはずの『日本古代文学人名索引』は、これまた存外に売れず不良在庫となった。望稜舎はその後数冊を出版してあっさりと閉めてしまった。加納さん曰く、駄目や、あれは儲からん。本人は大変だったのかもしれないが、無謀としか思えないよこしまな企みと、竹取物語の求婚譚のごとくあえない顛末は、加納さんの限りなく愛すべき人柄として、いつも我々を魅了した。もてあまされた不良在庫は、そのころ安曇川（あどがわ）河畔にあった加納邸の、庭から河原に降りる道の自力開削の際、階段作りの材として埋設された。自分の著書とはいえ本を埋めて道にするとは、と思ったが、当の本人はまったく意に介せずだった。わたしも坑書を手伝った。そういえば、当時冷や汗、今時（こんじ）笑い咄の焚書の件もあるが、加納さんの名誉のため、それはここには書くまい。思い当たる卒業生もいるだろう。ただその時も、加納さんがゼミの学生たちから心底慕われ、というより稀有の信頼を得ているのだと強く感じたことは、特記しておくべきことだと思う。

それにしても、苦学の人だった。普通ならば隠しておきたくなるような、広島県福山での自分の生い立ちや、そこから必然と陥るにいたった貧苦の中での大学生活を、初対面の日の宴席で何の躊躇もなく赤裸々に語り、呑気な大学生活を送ってきたわたしを驚かせた。すでに歴史物語研究に加納重文ありと学界に名を轟かせていた膨大な業績は、生活の資を得るため思うように勉学の時間が取れなかった鬱屈の時代の爆発だったのだろう。そのせいか、学問に臨む姿勢は、貪欲を超え、妄執といってもよいほど

だった。研究者になるべくして生まれてきた人に思えた。膨大なデータも独力で採取していた。普通ならば大学院生などに任せる基礎データの収集もすべて独力だったようだ。研究においては、甘く怠惰な研究時間を過ごしている者などは信用していなかったのだろう。だから研究には金と時間を惜しまなかった。パーソナル・コンピュータが出回り始めたころ、百万円近くする器具を研究室と自宅に一台ずつ備えていた。地名と人名に関する索引を作るために買ったと言っていた。が、大好きな囲碁のインターネット対局のためという疑惑も晴れたわけではない。囲碁の腕前は相当のものだったようだ。囲碁に時間を取られていなければ、僕はもうちょっとましな研究者になれていたろうに、と時折こぼしていた。研究でも趣味でも、思い立ったらためらいなど微塵もないように見えた。

　履歴については他人があれこれ書くべきものではないだろうから、「履歴にない話」（「芬陀利華」第二一六号　一九九七年五月二十六日　京都女子大学宗教部）に加納さん自身が書いているので、そちらに譲ることとする。そこにも書かれているが、東京教育大学での学生時代、担当教授ではなく、天才肌の小西甚一教授のほうに心酔していたと、加納さんがよく話していたことを覚えている。あんな天才見たことがない、のだそうである。京女大の研究室の机には、小さな写真立てがずっと置いてあった。これ誰か知ってるか？山岸徳平先生やで。そう言った時の加納さんは、なぜかとてもうれしそうだった。学問するに与えられた人生の短さは最近でこそ身にしみるけれど、まだ三十になったばかりだったわたしには、加納さんの過ごしてきた学問の時間への、懐旧と後悔などわかるはずはなかった。うれしそうな加納さんの心には、学問に取り組み始めた若き日の自分へのなつかしさと、それを振り返った時の苦い諦念が去来していたのではないかと、今では少しだけ思いあたる気がする。加納さんはよく言っていた。今の学生はあんなに自由に使える贅沢な時間があるのに、なぜ勉強しないのか、僕は頭に来るねん、と。同僚教員となっていたわたしは耳が痛かった。

　同僚といえば、加納さんとはふたまわりほど年が離れているので、企業であれば上司と部下という関係なのだろうが、大学ではそういうことはなく、同僚だった。少なくとも、はるか下臈のわたしを同僚として加納さんは遇してくれた。学問の上では仰ぎ見る存在だったけれど。同じ職場で同じ平安文学を専攻する身としては、最高の環境を作ってくれた。加納さんの傘の下でのうのうとしていたわたしは、加納さんが定年で京女大を去り動揺した。加納さんの代わりなどとても務まらないと思った。十二年経った

今もそれは変わっていない。

退職後の二〇一〇年秋、中古文学会が京都で開催されるのを機に、加納さん恒例の、いささか無謀とも言える企画が遂行された。学会員の有志を募り、琵琶湖北岸の塩津から、紫式部が越前往還に通ったであろう古道を峠越えしてたどろうというものだ。健脚の加納さんは平気だが、参加者の大半はそこそこのご年齢の大学教員、しかもほとんどが女性という足弱な団体での峠越え、かなりの不安を抱えての開催だった。懸念が案の定という当日の状況だったが、そこは加納さん、いつものなんとかなるさ、というよりも何ら危惧を感じていないらしく、行事を完遂させた。周囲が冷や汗をかくのも如常（つねのごとし）だった。この時のことは、『源氏物語の平安京』（二〇一一年　青蘭舎）に詳しいのでぜひにそちらを乞う御覧。この本、何しろ平安時代の歴史資料と文学に精通した加納さんによる平安時代地理ガイドだから、学問的質の高さ・正確さは言うまでもないが、道のあるところもないところも自分の足と目で確かめているので、机上で組み立てたガイド本とは桁違いのすごさと説得力がある。加納さんの本領があますところなく出ている本だと思う。その後、呑み屋での話のついでに、加納さん版の京都のガイド本を、一般向けに書いてほしいと頼んだことがある。原典の読みの正確さと足で確かめた精度の高さ、これまでのガイド本を凌駕するから、間違いなく売れる！、と持ちかけてみた。もちろん、その本をいちばん熱望しているのは、わたしだった。売れる、のひとことが功を奏したのか、加納さんもちょっと心が動いたようだった。だが、その本が世に出ることはなく、加納さんは死んでしまった。

京女大を退任する折、坂本さんにはずっと怒られっぱなしだったなあ、と加納さんが言った。即座に、怒られるようなことするからですよ、とまた叱られる。たしかに、学務のことでは加納さんをよく叱ったなあと思う。学生にはまだ公開しないでね、ということを、正直な加納さんはすぐに漏らしてしまう。学生への説明会の直前に注意したのに、九十分経って戻って来た時にはもう話していた、ということもあった。だから、加納さんは叱られる。しかし、心底怒らなければならないようなことは、一度たりともなかった。社会の建前を嫌い、つい裏の本音を学生に伝えてしまう、加納さんの実直さとやさしさを強く感じていた。でも、今回はほんとうに加納さんを叱らなければならない。どうしてこんなに早く死んだ。あなたにしかできない仕事は、まだまだたくさんあったのに。約束した京都ガイド本も受け取ってない。ほんとうにほんとうに、なんて多くの仕事を残して死んだのだ。頭に来て頭に来て、涙が出る。

病気だとわかって数年、手紙のやりとりしかできなかった。意気地のないわたしは、死と向き合っている加納さんを直接訪ねる勇気がなかった。蔵書はすべて処分したという手紙が来た時は、その絶望を思うといたたまれなかった。最後の著書となった『九条兼実――社稷の志、天意神慮に答える者か――』（二〇一六年ミネルヴァ書房）をまとめている時の加納さんは、残された時間のなさを覚悟していた、それでも諦めきれない様子であられた、と仄聞した。

筑紫の国にくすぶっていたわたしを拾って都へ連れて来てくれた加納さんへの恩返しは、論文でしか出来ない。だが同じ平安文学でも研究対象を異にしているので、これまで加納さんの論文を引いたことはなかった。王命婦のことを書くにあたり、加納さんの女官や女房についての論考を引用する機会を初めて得た。刷り上がったら送り、わずかでも学恩を返したいと思っていたが、九月に刷り上がった女子大國文は、間に合わなかった。

名誉教授加納重文先生死去の報がご遺族から届いた。二〇一八年八月十一日逝去、七十七歳。思えば、本学国文学科を去られて十二年。わたしが加納さんと福岡で会ってから二十七年が過ぎていた。退職後もずっと京女の国文学科のありようを、国文学を正しく学ぶことのできる大学であり続けられることを願い心配してくれていた加納さん。松本清張が大好きで、一時は本気で清張研究に取り組み、二冊も著書を上梓してしまったなんとも愛すべきロマンチスト加納さん。さようなら。すべてにおいて、ありがとう。

【公開講座聴講記】（六月七日）

「軍記史の終章」を聴講して

二回生　樫原まい

今回春の公開講座において、かつて本学で教鞭をとられていたという軍記史がご専門の笹川祥生先生から貴重なお話を伺う機会を得た。

講義内容は、最初にそもそも軍記物語の定義とは何かという提起と、軍記物語が成立するための条件が挙げられた。まず作品の主題となる戦があり、それを目の当たりにするか、伝え聞くかの違いはあるが、その戦の情報を得た人物がいること、そして人物が戦について書くために必要な文字という手段を持っていることなどが最低限の成立要素となる。ただしそれだけで作品が生まれるわけではもちろんなく、作者となる人物がその戦から何かを読

み取り、感じ、世の人に伝えたいと考えたために執筆がなされた。そのため、同じ戦を主題にとっても、作者によってそれをどう感じ表現するかは全く異なってくるという。ほかにも、作者の身分や立場、生きた年代によっても、事件の受け止め方は変わってくるはずである。

執筆時期の差を示す例として、一、戦を体験した世代、二、戦争体験はないが同時代を生きた世代、三、親やそれより上の世代が語る戦争体験を聞いた世代または書籍によって学んだ知識がすべての世代、などを挙げて、戦争体験の有無や関与する程度の差によって当事者意識や理解の程度に差が生じることがあると説かれた。この説明は私にとっては非常に理解がしやすかった。というのも、私の亡き祖父が戦争を体験して、その際の話を私がまだ幼いころから語ってくれたためである。つまり、ここでいう三にあたる。戦争中は死に物狂いで戦い、感覚が麻痺していたため、看護婦に驚かれるまで脚に弾を受けたことにさえ気づかなかったこと、その弾が脚の中に残ったままで今でも痛みが残っていること、友人の兵士と夜歓談し、次の朝には友人が冷たくなっていたこと、シベリアに抑留されて鉄道工事を強制され、厳しい労働や貧しい食事に終戦後にも関わらず幾人もの仲間が倒れたことなどたくさんの話をしてくれた。加えて私自身その話に興味をもってシベリア抑留者の書いた書籍などを読んでいたせいで、どこまでが祖父の体験でどこからが書籍から得た情報だったか、おぼろげになってしまった部分もある。よって、このように私と祖父のような世代の違う執筆者が書いた作品ををひとくくりに語るのは危険であると私自身も感じる。祖父の話を聞いていてひどいと思う話もたくさんあったが、ここで私が思うひどさと、祖父が体験したひどさとは想像もできないくらいかけ離れていると思われる。もちろん必ずしも経験者の理解がすべて正確で、後の世代の執筆者が間違っているとは言わないが、両者の間にある差異は読者の側も意識する必要があるのではないかと思う。

ここまでは執筆の当事者の問題であるが、次に時代の変化に伴う軍記物語自体の質の変化の問題もある。江戸時代以降、戦といえるほど大きな戦乱は、国内ではほとんど起こらない。第二次大戦などは大規模ではあるが、江戸時代以前の戦とは明らかに異質である。戦時中、言論統制や検閲などが横行し、政治権力の側に立った作品ばかりが広まった。よって、そうした戦争を取り巻く状況の違いに合わせて戦の呼称も「軍記」と「戦記」に呼び分けられるようになった。以上のように、軍記物語は戦が起こった時代や状況、執筆者の出自や信条、年代などによって全く性格の異なる、戦の享受のありかたが窺えるものであると知った。

公開講座に参加して

三回生　小　山　　咲

今回の公開講座は、『軍記史の終章』という題で軍記史の大まかな流れ、歴史、それぞれの作品がどのようなものであったのかということについて笹川祥生先生にご講演していただきました。軍記の歴史はとても長く、前史として『古事記』や『日本書紀』の時代から、近世までいたるという事を学びました。敗者の嘆きなど、戦争自体より、その周りの環境について記したものや、戦争を用いて政治などを批判するものなど、軍記を名のっているが軍記ではないものなどがあり、軍記という定義がそもそも難しいのだなと感じました。

軍記の研究は『平家物語』『太平記』への集中が強く、加えてそれぞれの時代、作品に精通している必要があるという言葉を聞き、通史研究を行うことはとても難しいものだと改めて感じました。また、軍記は古くから始まり、長い歴史の中で様々な内容のものが作られてきたものであり、一言で軍記といってもその容態は様々で、作品ごとに細かく違うものであると今回の講義を受講して、深く考えさせられました。

中でも、特に印象に残った『平家物語』と『太平記』を比較していた部分について記そうと思います。学会などでは室町軍記というと『明徳記』以降の作品を指すのだそうですが、笹川先生は『太平記』も室町時代のものであるので「室町初期軍記」という枠をつけられていました。『太平記』は人の限界と可能性について描かれており、『平家物語』とは違う一面を持つということが実際に用例を見ることで分かるのだそうです。『平家物語』では、「ⓐ一門運尽きて、けふ既に帝都を罷り出て候。ⓑちかごろは源氏の運かたぶき、ⓒ入道の悪行超過せるによって、一門の運命すでにつきんずるにこそ。ⓓ今年又入道相国うせ給ひぬ。運命の末になる事あらはなりしかば、ⓔ若不思議に運命ひらけて、又都へたちかへらせ給はん時は、ありがたき御情でこそ候はんずれ。」というふうに、平家が都を離れるのも運が尽きたからだと記されるなど、根本には「人は運を変えられない」という考え方があることが分かりました。対して『太平記』では「ⓐサシモノ名将勇士ナリシカ共、運尽キテ討タルヽヲ知ル人更ニ無カリシカバ、続イテ助クル人モナシ。ⓑ伊豆駿河辺ニ相支ヘ、合戦仕リテ運ノ程ヲ見候ハン。（略）ⓕ勝ツニ乗リテ追懸ケ、敵ヲ千里ノ外ニ追散シ、御運ヲ一時ニ可開。ⓖ運命天ニアリ。名ヲ惜マントハ思ハザランヤ。ⓗ我縦ヒ運命尽キテ戦場ニ命ヲ失フ共、君何クニモ御座有リト承ラバ（略）」というふうに、「運は開くことが出来

るもの」という考え方があるのだということを知ることが出来ました。軍記という枠組みの中でも、考え方は様々あるのだという事がとても詳しく述べられており、分かりやすく、あらためて大変勉強になりました。

【国文学会旅行印象記】（十一月十一日）

秋の彦根　歴史と文化にふれる旅

三回生　久　保　千　宙

今回の国文学会旅行では、大河ドラマ『おんな城主　直虎』で話題となった彦根に行きました。私は滋賀県に行くのは今回が初めてだったため、どのような旅になるのかと、わくわくした気持ちで集合場所の京都駅に向かいました。

学会旅行の担当の方のお手製の「旅のしおり」をいただき、まずは彦根城に向かうことになりました。「旅のしおり」は学会旅行委員の方が、見学場所の紹介、グルメスポット、おすすめスポットなど、見学先の歴史的な情報や、楽しい注目ポイントをとても分かりやすくまとめてくださっていました。この「旅のしおり」のおかげで、より楽しく、様々なことを学ぶことができました。

最初に見学したのは彦根城博物館です。彦根の歴史や文化を学ぶことができる美術工芸品や古文書をたくさん見ることができました。また、「長曾祢虎徹―新刀随一の匠―」という特別展をみることができました。この特別展では、彦根の長曽根村に起源を持つとされる長曾祢鍛冶に連なる刀工で、江戸時代前期に活躍した長曾祢虎徹を取り上げ、その作品を多く展示しており、実際に見ることは珍しい日本刀を間近で見ることができました。私自身あんなにたくさんの日本刀を見たのは初めてでしたが、一つ一つ大きさや刻まれている文字などが異なり、ほとんどの刀が傷ひとつなく、とても美しいものでした。

博物館はとても広く、たくさんの展示がありましたが、その中でも印象に残ったのが能に関する展示です。面や衣装がいろいろあり、とても興味深かったです。また、彦根城博物館の中央には、表御殿の中で唯一現存する江戸時代の建物である能舞台がありました。かなり近いところから見ることができ、毎年「彦根城能」や「狂言の集い」を開催しており、見ることができると知り、ぜひ見てみたいと思いました。

彦根城博物館を出たお堀では、鉄砲隊の方々の実演を見ることができました。五人ほどの鉄砲隊の方々が戦国時代のような赤い

甲冑を身につけて一列に並び、一斉に撃ったり、一人ずつ順番に撃ったりという実演でした。想像していたよりもかなり音が大きく、驚きましたが、実際に火縄銃の実演を見たり聞いたりする体験はなかなかできないと思います。

そしていよいよ国宝・彦根城天守閣に向かって長い石段を頑張って上りました。天守閣の中では、階段というより梯子といったほうが良いような角度の階段を上り、大変な思いをしましたが、天守閣からは登ってきた景色を一望でき、遠くに琵琶湖まで見ることができました。

次に向かった名勝・玄宮楽々園は、彦根城の北東にある大名庭園で、琵琶湖や中国の瀟湘八景にちなんで選ばれた近江八景を模して四代藩主直興が造営したもの、ということでした。台風の被害が少し見られましたが、大きな池泉や紅葉がとても美しい庭園でした。

その後は自由行動ということで、「旅のしおり」のグルメスポットを頼りに昼食を食べました。たくさん歩いて疲れたあとに食べた近江牛の焼肉丼は、本当においしかったです。また、日本茶専門店の限定抹茶ソフトクリームは抹茶の香や味がしっかりしていて、近江牛でお腹いっぱい、と言いながらもあっという間に食べてしまいました。

朝は少し曇っていましたが、よい天気に恵まれ、道中、電車から見えた景色や、彦根城、玄宮楽々園では美しい紅葉を見ることができ、彦根の秋を満喫できた一日となりました。

京都に帰り着くと、お忙しい中、中前先生にもお越しいただき、食事会が開かれました。普段は授業以外でお話することは少ない先生方や、学年の違う参加者の皆さんとも、食事をしながら彦根で見たことをはじめ、たくさんお話ができ、とても楽しく、有意義な時間を過ごすことができました。

最後になりましたが、お忙しい中引率してくださった池原先生、山中先生、川島先生、お仕事のあとにわざわざ来てくださった中前先生、このような楽しい旅を計画してくださった学会旅行委員のお二方、本当にありがとうございました。とても有意義で楽しい時間を過ごすことができました。国文学会旅行に参加して、本当に良かったです。

『女子大國文』投稿規定

一、（投稿資格）

① 京都女子大学国文学会の会員は投稿することができる。

② 京都女子大学国文学会の会員以外の者も、編集事務局の判断で寄稿を認める。

二、（刊行回数・時期・投稿の締め切り）

① 毎年二回、九月と一月に刊行する。

② 毎年、五月十日と九月三十日を投稿の締め切りとする（厳守）。

三、（投稿の枚数）

枚数は原則として自由であるが、四百字詰原稿用紙、四十枚（注・表・図版などを含む）を目安とする。また、完全原稿であることを原則とする（多少の加筆訂正はやむを得ないが、段落や章の差し替えなど大幅な修正を加えたものは、査読を行う関係上不可）。

四、（投稿に際して提出すべきもの）

① 手書き原稿の場合、投稿原稿二部（審査用。二部ともコピーしたものでも可）。

② ワープロ原稿の場合、プリントアウトしたもの二部（審査用）と、投稿原稿が収められている電子データ（ワープロ専用機の場合は機種、パソコンを使用の場合はワープロソフト名を通知すること）。

五、（投稿に際しての注意事項）

① 論文末尾に所属、回生、卒業年度などを丸ガッコに括って記すこと。本学の教員・院生・学生の場合は、（本学教授）（本学大学院博士後期課程）（本学文学部国文学科四回生）などと記す。

② 連絡先の住所を記した別紙を添えること（採否の知らせや校正送付等のため）。その際、投稿原稿についての連絡事項をすみやかに行うために、差し支えなければ、電話番号・ファックス番号・メールアドレスなども添えること。内部の教員・院生・学生は直接原稿のやりとりをするので、住所は不要だが、必要に応じて電話番号やメールアドレスを『女子大國文』編集事務局から聞くことがある。これらの個人情報については、投稿原稿についての連絡以外に使用す

ることはしない。

六、（投稿先）

投稿先は以下の通り。

〒六〇五―八五〇一　京都市東山区今熊野北日吉町三五番地

京都女子大学国文学会

『女子大國文』編集事務局

七、（投稿論文の採否）

投稿論文の採否は、編集委員の査読、または関連分野の外部研究者査読の結果を経て、編集委員会にて決定し、結果を投稿者に通知する。

八、（校正）

校正は原則として、再校までとする。校正段階での大幅な修正は、査読を経た関係上認められない。

九、（本誌・抜き刷りの贈呈）

投稿論文が掲載された場合、本誌二部、抜き刷り三十部を贈呈する。増刷希望の場合は、実費執筆者負担で受け付けるので、採用の通知を受けてからすみやかに『女子大國文』編集事務局まで連絡すること。

十、（掲載論文の著作権及び電子媒体による公開）

本誌に掲載された論文等については著作権の複製権・公衆送信権を京都女子大学国文学会及び京都女子大学に許諾するものとする。但し、著作権の移動はなく、著作者は両者、或いはいずれか一方への許諾をいつでも取り消すことができる。

本誌に掲載された論文等の全文又は一部を電子化し、京都女子大学学術情報リポジトリサーバ或いはその他のコンピューターネットワーク上で公開することがある。

十一、（規定の改正）

① 本規定の改正は、会員の議決を経なければならない。

② 規定の改正の結果は、すみやかに本誌に掲載する。

附則

本投稿規定は平成十八年三月二十日より施行する。

本投稿規定は平成二十三年十月五日より一部改正施行する。

本投稿規定は平成二十四年十月二十四日より一部改正施行する。

編集後記

今号の査読委員は次の方々です。

川島朋子・小山順子・滝川幸司・山﨑ゆみ・山中延之

以上の各氏に査読を依頼し、編集委員会において査読の結果を報告、審議の結果、五点が掲載となりました。

なお本号は頁数が大幅に増加したため、田上氏の翻刻を（上）（下）に分割し、（下）は次号に掲載することになりました。

また、笹川祥生先生に公開講座での御講演内容を御寄稿賜りました。厚く御礼申し上げます。

今後とも、会員の皆様の投稿をお待ちしております。

（小山・山﨑）